

# 春寒

寺田寅彦

青空文庫



スカンジナヴィアの遠い昔の物語が、アイスランド人の口碑に残って伝えられたのを、十二世紀の終わりにスノルレ・スツール・ラソンという人が書きつづった記録が *Heimskringla* という書物になって現代に伝えられている。その一部が英訳されているのを、おもしろそうだと思つて買つて来たまま、しばらく手を触れないで打つちやつておいた。

ことしの春のまだ寒いころであつた。毎日床の中に寝たきりで、同じような単調な日を繰り返しているうちに、ふと思ひ出してこの本を読んでみた。初めの半分はオラーフ・トリীগヴェスソンというノルウェーの王様の一代記で、後半はやはり同じ国の王で

あつたが、後にセント・オラーフと呼ばれた英雄の物語である。

大概は勇ましくまた殺伐な戦闘や篡奪さんだつの顛末てんまつであるが、それがただの歴史とはちがつて、中にいろいろな対話が簡潔な含蓄のある筆で写されていたり、繊細な心理が素朴そぼくな態度でうがたれていたりするのをおもしろいと思つた。それから一つの特徴としては、王の軍中に随行して、時々いくさの戦の模様や王の事蹟じせきを即興的に歌つた詩人 (Scalds) の歌がいろいろどころにはさまれている事である。それがために物語はいつそう古雅な詩的な興趣を帯びている。

日本に武士道があるように、北歐の乱世にはやはりそれなりの武士道があつた。名誉や信仰の前に生命を塵埃じんあいのように軽んじ

たのはどこでも同じであつたと見える。女にも烈婦があつた。そしてどことなくイブセンの描いたのに似たような強い女も出て来た。さすがにワルキリーの国だと思われたりした。

オラーフ・トリীগヴェソンが武運つたなく最後を遂げる船ふねないくさ

戦いくさの条は、なんとなく屋島やしまや壇だんの浦うらの戦いくさに似通つていた。王

の御座船「長蛇ちようだ」のまわりには敵の小船いが蝗なごのごとく群むらがつて、

投げ槍やりや矢やが飛びちがい、青い刃やがひらめいた。盾たてに鳴る鋼はがねの音

は叫きよう喊かんの声こゑに和なして、傷やついた人は底知れぬ海うみに落ちて行いつ

た。……王の射手エーナル・タンバルスケルヴェはエリツク伯はくをねらつて矢やを送ると、伯の頭上かぶをかすめて舵柄だへいにくぎと立たつ。

伯はかたわらのフィンを呼んで「あの帆柱ほしのそばの背せの高いやつ

を射よ」と命ずる。フィンの射た矢は、まさに放たんとするエーナルの弓のただ中にあたって弓は両断する。オラーフが「すさまじい音をして折れ落ちたのは何か」と聞くと、エーナルが

「王様、あなたの手からノルウェーが」と答えた。王が代わりに自分の弓を与えたのを引き絞つてみて「弱い弱い、大王の弓にはあまり弱い」と言つて弓を投げ捨て、劍と盾とを取つて勇ましく戦つた。——私は那須与一なすのよいちや義経よしつねの弓の話の思い出したりした。

私がこの物語を読んでいた時に、離れた座敷で長女がピアノの練習をやっているのが聞こえていた。そのころ習い始めたメンデルスゾーンの「春の歌」の、左手でひく低音のほうを繰り返し繰り返しさらっていた。八分の一の低音の次に八分の一の休止があ

つてその次に急速に駆け上がる飾音のついた八分の一が来る。そこでペダルが終わって八分の一の休止のあとにまた同じような律動が繰り返される。

この美しい音楽の波は、私が読んでいる千年前の船ふないくさ戦の幻像の背景のようになって絶え間なくつづいて行った。音が上がって行く時に私の感情は緊張して戦の波も高まって行った。音楽の波が下がって行く時に戦もゆるむように思われた。投げ槍なやりや斧おのをふるう勇士が、皆音楽に拍子を合わせているように思われた。そして勇ましいこの戦いくさの幻は一種の名状し難い、はかない、うら悲しい心持ちのかすみの奥に動いているのであった。

今はこれまでというので、王と將軍のコールビオルンふなばたは舷から

海におどり入る。エリックの兵は急いで捕えようとしたが、王は用心深く盾を頭にかざして落ち入ったので捕える事ができなかつた。盾を背たてにしていた將軍は盾の上に落ちかかり、沈む事ができなかつたために虜とりことなつた。

王はこの場で死んだと思われた。しかし泳ぎの達人であつた王は、盾の下で鎖帷子くさりかたびらを脱ぎ捨ててここを逃げのびてヴェンドラの小船に助けられたというわさも伝えられた。ともかくも王の姿が再びノルウェーに現われなかつたのは事実である。

すぐれた英雄の戦没した後、こつこつというわさの生まれたのはいつの世でも同じだと思われる。この戦いくさを歌つた当時の詩人の歌の最後の句にも「人はその願う事をやがて信ずる」と言っている。

ピアノの音はこの物語の終わりまでつづいて行った。読み終わった本を枕もとへ置いて、蒲団をかぶつて聞いていると、音楽の波に誘われて物語の幻は幾度となく繰り返し繰り返し現われた。そしてこの王の運命の末路のはかなさがなんとなしに身にしみるようであった。

その後にもまたつづけて書物の後半になっているセント・オラーフの一代記を読んだ。

向こうところに敵なくして剣の力で信仰と権勢を植え付けて行った半生の歴史はそれほど私の頭に今残っていないが、全盛の頂上から一時に墜落してロシアに逃げ延び、再びわずかな烏合の衆を引き連れてノルウェーへ攻め込むあたりからがなんとなく心に

しみている。そのころから王の周囲には一種の神秘的な影がつきまどつていて不思議な幻を見たり、さまざまな奇蹟きせきを現わしている。

スチクレスタードの野の戦いくさの始まる前に、王は部下の将卒の団だんらんの中で、フィン・アルネソンのひざを枕まくらにしてうたた寝をする。敵軍が近寄るのでフィンが呼びさますと、「もう少し夢のつづきを見せてくれればよかったのに」と言つてその夢の話をして聞かせる。高い高い梯子はしごが立つてその上に天の戸が開けていた、王がそれを登りつめて最後の段に達した時に起こされたのだと言ふ。フィンはその夢が王の思うほどよい夢ではない、眠りの不足のせいではなければそれは王の身の上にかかる事だと言つた。

王は黄金を飾った兜かぶとをきて、白地に金の十字をあらわした盾たてと投げ槍なやりとを持ち、腰にはネーテと名づける剣を帯び、身には堅固くさりかたびらな鎖帷子な鎖帷子を着けていた。

美しい天気であつたのが、戦いくさが始まると空と太陽が赤くなって、戦の終わるころには夜のように暗くなつたと伝えられている。天文学者の計算によるとその日に日食はなかつたはずだという事である。

戦いは王に不利であつた。……王はトーレ・フンドに切りつけたが、魔法の上着は切れなかつた。そしてトーレの着たとないの皮からぱつと塵ちりが飛び散つた。王は將軍のビオルンくま（熊）に「鋼鉄のかみつけないこの犬（フンド）はお前が仕止めてくれ」

と言った。ビオルンは斧おのをふるってその背を鎚つちにして敵の肩を打つとフンドはよろめいて倒れんとした。トールスタイン・クナーレスメドは斧で王を撃つて左のひざの上を切り込んだ。……王がよろめき倒れてかたわらの石によりかかり、神の助けを祈つているところへ敵将が来て首と腹を傷つけた。

戦いが終わってトール・フンドは王の死骸しがいを地上に延ばして上着を掛けた。そして顔の血潮をぬぐって見ると頬ほおは紅を帯びて世にも美しい顔ばせに見えた。王の血がフンドの指の間を伝い上つて彼の傷へ届いたと思うと、傷は見るまに癒合ゆごうして包帯しなくてもよいくらいになった。……王の遺骸はそれから後もさまざまの奇蹟きせきを現わすのであった。

私がこのセント・オラーフの最期の顛末てんまつを読んだ日に、偶然にも長女が前日と同じ曲の練習をしていた。そして同じ低音部だけを繰り返し繰り返しさらっていた。その音楽の布しいて行く地盤の上に、遠い昔の北国の曠野ひろうの戦いが進行して行つた。同じようにはかないうら悲しい心持ちに、今度は何かしら神秘的な気分が加わつていたのであつた。

忠義なハルメソンとその子が王の柩ひつぎを船底に隠し、石ころをつめたにせの柩を上に飾つて、フィヨルドの波をこぎ下る光景がありあり目に浮かんだ、そうしてこの音楽の律動かが櫂かいの拍子を取つて行くように思われた。

その後にも長女は時々同じ曲の練習をしていた。右手のほうで

ひいているメロディだけを聞くとそれは前から耳慣れた「春の歌」であるが、どうかして左手ばかりの練習をしているのを幾間か隔てた床とこの中で聞いていると、不思議に前の書中の幻影が頭の中によみがえって来て 船ふないくさ 戦の光景や、セント・オラーフの奇蹟きせきが幾度となく現われては消え、消えては現われた。そして音の高低や弛しちよう張につれて私の情緒も波のように動いて行つた。異国の遠い昔に対するあくがれの心持ちや、英雄の運命の末をはかなむような心持ちや、そう言ったようなものが、なんとなく春の怨うらみを訴えるような「無語歌」と一つにとけ合つて流れ漂つて行くのであつた。

そして今でもこの曲を聞くと、蒲団ふとんの外に出して書物をささえ

た私の指先に、しみじみしみ込むようであつた春寒をも思い出すのである。

(大正十年一月、渋柿)



# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第一卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

入力：田辺浩昭

校正：かとうかおり

2003年5月27日作成

2010年8月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 春寒

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>